

【翻訳(訳注)】

張果関連文献訳注稿(中)

川 口 喜 治

【キーワード】張果、太平広記、宣室志、李頎

はじめに

本稿は、「張果関連文献訳注稿(上)」(山口県立大学大学院論集)二二二号、二〇二〇年の続篇である。

本稿では、上篇に掲載した『太平廣記』『張果』の残りとして、『宣室志』巻八所収のエピソード、そして李頎が張果に拜謁したときに贈った「謁張果先生」詩の訳注を掲載する。

凡例に相当するものは、上篇を参照されたい。

二、『太平廣記』『張果』(承前)、『宣室志』巻八

(七)『太平廣記』卷三十・神仙三十「張果」(承前)

【原文】

未幾、玄宗狩於咸陽、獲一大鹿稍異常者。庖人方饌、果見之曰、「此仙鹿也。已滿千歲。昔漢武元狩五年、臣曾侍從敗於上林。時生獲此鹿、既而放之。」玄宗曰、「鹿多矣。時遷代變。豈不爲獵者所獲乎。」果曰、「武帝捨鹿之時、以銅牌誌于左角下。」遂命驗之、果獲銅牌二寸許、但文字凋暗耳。玄宗又謂果曰、「元狩是何甲子。至此凡幾年矣。」果曰、「是歲癸亥、武帝始開昆明池。今甲戌歲、八百五十二年矣。」玄宗命太史氏校其長曆、略無差焉。玄宗愈奇之。

【書き下し文】

未だ幾ばくならずして、玄宗咸陽に狩りし、一大鹿の稍か異常なる者を獲。庖人方に饌えんとし、果之れを見て曰く、「此れ仙鹿なり。已に千歳に満つ。昔漢武の元狩五年、臣曾て侍して敗に上林に従う。時に此の鹿を

生獲し、既にして之れを放つ」と。玄宗曰く、「鹿多し。時遷り代変わる。豈に獵る者の獲る所と為さずや」と。果曰く、「武帝鹿を捨つるの時、銅牌を以て左角の下に誌す」と。遂に命じて之れを驗させば、果して銅牌の二寸許りを獲れども、但だ文字凋暗せり。玄宗又た果に謂いて曰く、「元狩は是れ何の甲子か。此に至るまで凡そ幾年なるか」と。果曰く、「是の歳は癸亥にして、武帝始めて昆明池を開く。今は甲戌の歳なれば、八百五十二年なり」と。玄宗太史氏に命じて其の長曆を校べしむれば、略ぼ差無し。玄宗愈いよ之れを奇とす。

【大意】

それからいくらか経たないときに、玄宗は咸陽で狩猟をし、一匹の異常な大きさの鹿を獲物とした。料理番がそれを調理し、ちようと配膳しようとしていたら、張果がそれを見て言った、「これは仙鹿でございます。すでに千歳になっております。むかし漢の武帝の元狩五年、臣は帝が上林苑で狩猟されるのにお供致しました。このときに、この鹿を生け捕りにされ、そうして放たれたのでございます。」玄宗が言った、「鹿はたくさんいる。時代は移り変わっている。そのとき狩猟で生け捕りにした鹿であろうはずはなからう。」張果が言った、「武帝が鹿を手放される時に、銅のふだを鹿の左の角の下につけて目印とされました。」そこで玄宗は調べるように命じると、張果の言ったとおり二寸ほどの銅のふだが見つかったが、ただ文字は削れて判別できなくなっていた。玄宗はまた問うた、「元狩五年の干支は(千千十二支)何か。今に到るまで全てで何年か。」張果がお答えした、「その歳の干支は癸亥でございますから、八百五十二年に昆明池を開鑿されました。今は甲戌の歳でございますから、武帝が新しくなります。」玄宗は記録官にこよみを調べさせると、ほぼ誤差がなかった。玄宗はますます張果を異能の者と考えたのであった。

【注釈】

●咸陽：渭水を挟んで長安の対岸にあるまち。陝西省咸陽市。

●庖人：料理人。

●方：「将」に同じ。

●饌：料理をそなえる。

●元狩五年：紀元前一八八年。

●上林：上林苑。秦の皇帝が造営した広大な動植物園、自然公園。のちに荒廃したものをも漢の武帝が再建した。都の長安の西南に位置した。

●銅牌：銅製のふだ。

●寸：唐代の一寸は、約三センチメートル。

●許：くくらしい。

●凋暗：傷んで見えにくくなっている、という意味であろう。

●癸亥：元狩五年の干支は癸亥である。干支を尋ねたのは、六十年に一度の組み合わせであり、それが八百年以上の前のことであれば、即答することが困難だと考えたからであろう。

●昆明池：漢の武帝が長安の南に掘削した軍事訓練用の湖。『漢書』では元狩三年とある。『漢書』卷六・武帝紀「（元狩）三年、……發論吏穿昆明池。」如淳注「食貨志以舊吏弄法、故謫使穿池、更發有賢者爲吏也。」臣瓚注「西南夷傳有越嶲、昆明國、有滇池、方三百里。漢使求身毒國、而爲昆明所閉。今欲伐之、故作昆明池象之、以習水戰、在長安西南、周回四十里。食貨志又曰、時越欲與漢用船戰、遂乃大修昆明池也。」顏師古注「謫吏、吏有罪者罰而役之。滇音顛。」

●甲戌：開元二二年（七三四）。

●太史氏：史官。記録官。

●長曆：曆法の推算によって、これまでの年月の朔閏（ついたちと閏月）を求めた書物。

●校：かぞえる。しらべる。

【原文】

時又有道士葉法善、亦多術。玄宗問曰、「果何人耶。」答曰、「臣知之。然臣言訖即死。故不敢言。若陛下免冠跣足救臣、即得活。」玄宗許之。法善曰、「此混沌初分白蝙蝠精。」言訖、七竅流血、僵仆于地。玄宗遽詣果所、免冠跣足、

自稱其罪。果徐曰、「此兒多口過。不諱之、恐敗天地間事耳。」玄宗復哀請久之。果以水噴其面、法善即時復生。其後曩陳老病、乞歸恆州。詔給驛送到恆州。天寶初、玄宗又遣徵召。果聞之、忽卒。弟子葬之。後發棺、空棺而已。

出『明皇雜錄』、『宣室志』、『續神仙傳』。

【書き下し文】

時に又た道士葉法善有りて、亦た術多し。玄宗 問いて曰く、「果は何人たるか」と。答えて曰く、「臣 之れを知る。然れども臣 言ひ訖れば即ち死す。故に敢えて言わず。若し陛下免冠跣足して臣を救わば、即ち活くるを得」と。玄宗 之れを許す。法善 曰く、「此れは混沌の初めに分れし白蝙蝠の精なり」と。言ひ訖りて、七竅より流血し、地に僵仆す。玄宗 遽に果の所に詣り、免冠跣足し、自ら其の罪を称う。果 徐に曰く、「此の児は口過多し。之れを諱めずば、恐らくは天地の間の事を敗らん。」玄宗 復た哀請すること之れを久しくす。果 水を以て其の面に噴けば、法善 即時に復生す。其の後 累りに老病を陳べ、恆州に帰るを乞う。詔して驛を給ひ送りて恆州に到る。天寶の初、玄宗 又た遣りて徵召す。果 之れを聞き、忽に卒す。弟子 之れを葬る。後に棺を發けば、空棺なるのみ。

『明皇雜錄』、『宣室志』、『続神仙傳』に出づ。

【大意】

また当時、道士の葉法善という者がいて、やはり多彩な術を使つた。玄宗は下問した、「張果はどういう人か。」葉法善は、「臣はそれを知っております。しかしながら臣がそれを申し上げますと、申し上げた途端に死んでしまいます。ですから、申し上げるつもりはございません。ただもし陛下が冠を脱がれ靴を脱がれて臣をお救いになつていただくのであれば、すぐに生き返ることができます」とお答えした。玄宗はそれを許諾した。葉法善が言った、「張果は、天地がはじめまだ分れずませこぜであった時に分れ出た白コウモリの精でございます。」葉法善は言ひ終わると、両目、両耳、鼻の穴、口から血が流れ出し、地面に倒れ伏してしまつた。玄宗は、あわてて張果の所にはせ参じ、冠を脱ぎ靴を脱いで自分自身の口からその罪を述べた。張果はもつたいをつけて言った、「こやつめは、失言が多いのでございます。罰を与えなければ、おそらく天地の大事を壊してしまうでしょう。」玄宗はさらに哀願し続けた。そこで張果は水を口に含んで葉法善の顔に吹きつけると、たちまち生き返つた。その後、張

果は、年老いて病気がちであることをしきりに申し述べ、恒州に帰ることを願
い出た。玄宗は詔を出し、張果に車馬で駅を乗り継ぐという待遇を与えて恒州
まで送った。天宝の初めに、玄宗は再び使者を使わして召し出そうとした。張
果はそのことを聞くと突然死んでしまった。弟子達が張果を埋葬した。その後、
棺を開くと、棺は空っぽであった。

【注釈】

『明皇雜錄』、『宣室志』、『続神仙伝』が出典である。

●免冠跣足：冠を脱ぎ、靴を脱いで裸足になる。

●混沌：天地がまだ未分化な状態。カオス。

●白蝙蝠：『古今註』巻中・魚蟲第五「蝙蝠、一名仙鼠、一名飛鼠。五百歳則
色白。而腦重集物則頭垂、故謂之倒挂。蝙蝠、食之成仙。」「抱朴子」仙藥「肉

芝者、謂萬歲蟾蜍、頭上有角、額下有丹書八字再重、以五月五日日中時取之、
陰乾百日、以其左足畫地、即爲流水、帶其左手於身、辟五兵、若敵人射己
者、弓弩矢皆反還自向也。千歳蝙蝠、色白如雪。集則倒懸、腦重故也。此二
物得而陰乾末服之、令人壽四萬歳。」李頎「送王道士還山」「當有巖前白蝙蝠、
迎君日暮雙來飛。」（『全唐詩』卷一三三）李白「答族姪僧中孚贈玉泉仙人掌
茶并序」序「余聞荊州玉泉寺近清溪諸山、山洞往往有乳窟。窟中多玉泉交流。
其中有白蝙蝠、大如鴉。按仙經、蝙蝠一名仙鼠。千歳之後、體白如雪。棲則
倒懸。蓋飲乳水而長生也。其水邊處處有茗草羅生、枝葉如碧玉。唯玉泉眞公
常采而飲之、年八十餘歳、顔色如桃李。而此茗清香滑熟、異於他者、所以能
還童振枯、扶人壽也。」（『全唐詩』卷一七八）。

●七竅：七つの穴。両目、両耳、鼻の穴、口。『莊子』應帝王「南海之帝爲儻、
北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌。儻與忽時相與遇於渾沌之地、渾沌待之甚善。
儻與忽謀報渾沌之德、曰、人皆有七竅、以視聽食息。此獨無有、嘗試鑿之。
日鑿一竅、七日而渾沌死。」

●僵仆：倒れ伏す。
●遽：あわてて。
●詣：進み至る。

●此兎：こいつ。「兎」は、ここでは軽蔑・侮蔑の意味を持つ。
●口過：失言。

●譴：罪を責め問う。とがめる。

●哀請：哀願する。

●即時：すぐに。たちまち。

●復生：再生する。

●陳：申し述べる。

●給驛：車馬で駅を乗り継ぐことを許可する。『新唐書』卷一六・張九齡列
傳「數乞歸養、詔不許。以其弟九皋、九章爲嶺南刺史、歲時聽給驛省家。」

●空棺：『北齊書』卷三二・陸法和列傳「無疾而告弟子死期、至時、燒香禮佛、
坐繩牀而終。浴訖將斂、屍小、縮止三尺許。文宣令開棺視之、空棺而已。」

●『明皇雜錄』：唐・鄭處誨撰。大中九年（八五五）序。鄭は、大和八年（八三四）
の進士。（唐宋史料筆記叢刊『明皇雜錄・東觀奏記』による。中華書局、
一九九四年）

●『宣室志』：唐・張讀撰、大中五年（八五一）以降のもの。（古小説叢刊『獨異志・
宣室志』による。中華書局、一九八三年）

●『続神仙伝』：『續仙傳』とも。五代呉・沈汾撰。（李劍国『唐五代志怪伝
奇叙録』による。南開大学出版社、一九九三年）

●このほか、張果を主人公とする唐代伝奇の主要な記録は、劉肅『大唐新語』（元
和二年（八〇七）序。唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九八四年）、李德裕撰『次
柳氏舊聞』（大和八年（八三四））。唐宋史料筆記叢刊『教坊記外三種』、中華
書局、二〇一二年）に見える。

（八）『宣室志』卷八

右の『太平廣記』のエピソードの内、「仙鹿」のくだりは『宣室志』卷八に
少しく詳しいものがあるので、以下に訳注を示す。ここでは、『宣室志』（前掲
『古小説叢刊』本）を底本とする。なお『太平廣記』卷四四三・獸畜十・鹿「唐
玄宗」にはほぼ同じ記事が見える。

【原文】

開元二十三年秋、玄宗皇帝狩於近郊、駕至咸陽原。有大鹿興於前、轟然其軀
頗異於常者。上命弓射之、引發一中。及駕還、乃敕廚吏炙其脰以進、而尚食具
熟俎獻。時張果老先生侍。上命果坐於前、以其肉賜之。果謝而食。既食、且奏
曰、「陛下以此鹿爲何如。」上曰、「吾只知其鹿也、亦安知何如。」果曰、「此鹿
年且千歳矣。陛下幸聞之。」上笑曰、「此一獸耳。何遂言其千歳耶。」果曰、「昔

漢元狩五年秋、臣侍武帝獵於上林。其從臣有生獲此鹿而獻者。帝以示臣。奏曰、「此仙鹿也。壽將千歲。今既生獲、不如活之。」會武帝尚神仙、由是納臣之奏。」上曰、「先生誤矣。且漢元狩五年及今八百歲。其鹿長壽、豈歷八百歲而亦爲畋所獲乎。況苑圃內麋鹿亦多、今所獲何妨爲他鹿乎。」果曰、「曩時武帝既獲此鹿、將舍去之。但命東方朔以鍊銅爲牌、刻成文字以識其年、繫於左角下。願得驗之、庶表臣之不誣也。」上即命致鹿首於前、詔內臣力士具驗之。凡食頃、絕無所見。上笑曰、「先生果誤矣。左角之下、銅牌安在。」果曰、「臣請自索之。」即顧左右命鐵鉗、令出一小牌。實銅製者、可二寸許。蓋以年月悠久、爲毛革蒙蔽、殆不可見。且持以進、上命磨拭視之。其文字蕪蔽、殆不可識矣。上於是驗果之言不謬、又問果曰、「漢元狩五年、甲子何次。史編何事。吾將徵諸記傳、先生第爲我言之。」果曰、「是歲歲次癸亥、武帝始開昆明池、用習水戰。因蒐狩以順禮焉。迨今甲戌歲、八百五十二年。」上即命按漢史、其昆明池果元狩五年所開、其甲子亦無少差。顧謂力士曰、「異哉。張果能言漢武時事。眞所謂至人矣。吾固不可得而知也。」

【書き下し文】

開元二十三年秋、玄宗皇帝 近郊に狩りし、駕して咸陽原に至る。大鹿の前に興き、轟然として其の軀の顛る常に異なる者有り。上 弓もて之れを射るを命じ、引きて発てば一たびに中る。駕して還るに及び、乃ち廚吏に勅して其の膳を炙りて以て進めしめ、而して尚食 熟を具えて俎もて献す。時に張果老先生 侍す。上 果に命じて前に坐せしめ、其の肉を以て之れに賜う。果 謝して食う。既に食い、且つ奏して曰く、「陛下 此の鹿を以て何如と爲すか」と。上 曰く、「吾 只だ其の鹿なるを知るのみにして、亦た安んぞ何如と知らんや」と。果 曰く、「此の鹿は 年 且に千歳にならんとす。陛下 幸いに之れを聞く」と。上 笑いて曰く、「此れは一獸なるのみ。何ぞ遂に其の千歳なるを言うか」と。果 曰く、「昔 漢の元狩五年の秋、臣 武帝に侍して上林に獵す。其の從臣に此の鹿を生獲して獻する者有り。帝 以て臣に示す。奏して曰く、「此れ 仙鹿なり。寿は將に千歳ならんとす。今既に生獲し、之れを活かすに如かず」と。會たま武帝 神仙を尚び、是れに由りて臣の奏を納る」と。上 曰く、「先生 誤り。且つ漢の元狩五年は今に及ぶこと八百歳。其の鹿 長寿なりとも、豈に八百歳をて亦た畋するものの獲る所と爲らんや。況んや苑圃の内は麋鹿 亦た多く、今獲る所の何ぞ他の鹿と爲するを妨げんや」

と。果 曰く、「曩時 武帝 既に此の鹿を獲、將に之れを捨て去らんとす。但だ東方朔に命じて鍊銅を以て牌と爲し、刻して文字を成して以て其の年を識るし、左の角の下に繫がしむ。願くは之れを験すを得て、庶わくは臣の誣いざるを表さん」と。上 即ち命じて鹿の首を前に致さしめ、内臣力士に詔して具に之れを験さしむ。凡そ食頃、絶えて見る所無し。上 笑いて曰く、「先生 果して誤り。左の角の下、銅牌 安んじにか在る」と。果 曰く、「臣 請う自ら之れを索めん」と。即ち左右を顧み、鉄鉗を命じ、一小牌を出さしむ。実に銅製の者にして、二寸許可(可に二寸許り)りなり。蓋し年月悠久なるを以て、毛革の蒙蔽するところと爲り、殆ど見る可からず。且に持ちて以て進めんとすれば、上 命じて 磨拭して之れを視しむ。其の文字は蕪蔽して、殆ど識る可からず。上 是に於いて果の言の謬らざるを験し、又た果に問いて曰く、「漢の元狩五年は、甲子は何くにか次る。史は何事かを編む。吾 將にこれを記伝に徴む、先生 第だ我が爲に之れを言え」と。果 曰く、「是の歳は歲は癸亥に次り、武帝 始めて昆明池を開き、用て水戦を習わしむ。蒐狩に因りて以て礼に順う。今の甲戌の歳に迨ぶまで、八百五十二年なり」と。上 即ち命じて漢史を按べしむれば、其の昆明池は果して元狩五年の開く所にして、其の甲子も亦た少差無し。顧みて力士に謂いて曰く、「異なるかな。張果 能く漢武の時を事言う。眞に所謂至人なり。吾は固より得て知る可からざるなり」と。

【大意】

開元二三年の秋、玄宗皇帝は近郊で狩獵を行おうと、馬車に乗って咸陽原に行幸した。一頭の大きな鹿が現れ、驚くほど大きなそのからだは尋常ではなかった。天子は弓でこの鹿を射止めるように命じられ、狩人が弓を引いてはなつと、一度で命中した。馬車に乗って都に戻る時になったので、料理長に命じてその鹿のもも肉をあぶり焼きにして出させ、尚食(大膳の役人)は美味しく調理された肉を俎にのせて皇帝に献げた。そのとき、張果老先生が玄宗皇帝のおそばに侍っていた。天子は張果の前に坐るように命じ、その肉を下賜された。張果はお礼を申し上げて食べた。張果は食べ終わると、さらに申し上げた、「陛下はこの鹿をどのようなものと思召されますか。」天子が言った、「私はただそれが鹿であることを知っておるだけで、どのようなものかなどどうして知っていますか。」張果が言った、「この鹿はよわいが千歳になろうとしております。陛下は、どうか私の申すことをお聞き下さいませうに。」天子は笑って言っ

た、「これは一頭の獣であるにすぎない。どうしてよわい千歳などというのか。」張果が言った、「昔、漢の元狩五年の秋、臣は武帝が上林苑に狩猟されるにお供いたしました。侍従の臣下にこの鹿を生け捕りにして献上したものがおりました。帝はそれをお見せになりました。私は『これは仙鹿でございます。寿命は千年に達するでしょう。今生け捕りになされたからには、生かしておくに越したことはございませぬ』とご意見を申し上げました。おりよく武帝は神仙を尊重され、それによって臣の意見をお聞き入れになりました。」天子が言った、「先生は間違っておられる。しかも漢の元狩五年からは、今に至るまで八百年になる。その鹿が長生きであったとしても、どうして八百年が経ってからまた狩人に捕獲されることなどあるのか。ましてこの苑には大きな鹿も普通の鹿多く、いま捕獲した鹿がどうして別の鹿であることを否定できようか。」張果が言った、「かつて武帝はこの鹿を捕獲されたあと、解き放とうとされませんでした。ただ東方朔に命じて、精錬された高級な銅をふたとし、文字を刻んでその年を記し、左の角の下に結びつけさせられました。これを調べることをお許しいただき、臣がうそいつわりを申ししているのではないことを明らかにしようと存じます。」天子は鹿の頭を御前に持つてくるよう命じ、詔によって宦官の高力士に詳しく調べさせた。食事をするくらいの時間がたっても、全く見つからなかった。天子は笑って言った、「先生は案の定お間違いになった。左の角の下、銅のふだはどこにあるのか。」張果は「臣が自ら探しよう存じます」と言うとすぐにまわりの弟子達の方を見て、鉄のかなばさみを取らせ、小さなふだをひとつ角から取り出した。それはまさに銅製のふだで、(ちようど)二寸くらいだった。おそらく悠久の年月を経たためであろう、鹿の毛や皮が表面にひっついてしまい、ほとんど見ることができなかった。張果がそのふだを手にとってお見せしようとしたとき、天子は張果とはべつの臣下に磨いて汚れを拭き取りそれを確認させた。ふだの文字はすり減って見にくくなっていて、ほとんど判読することはできなかった。天子はそこで張果の言葉にうそいつわりがないことを調べようと、さらに張果に尋ねた、「漢の元狩五年は、干支(干十二支)は何か。歴史の記録はどのような出来事を編年しているか。私は史書を調べて明らかにするので、先生はただ私だけに答えられよ。」張果が言った、「この年は、木星は癸亥に位置し、武帝は新しく昆明池を開鑿され、そこで水上での戦闘の訓練をさせました。狩猟によって軍事訓練をされたのであり、それは儀

礼を遵守されたのです。本年の甲戌の歳に至るまで、八五二年でございます。」天子は即座に漢の歴史記録を調べるように命じると、張果の言葉通り、昆明池は元狩五年に開鑿されており、その干支にも僅かのずれもなかった。玄宗は高力士の方を見て言った、「たいしたものだ。張果は漢の武帝の時代の出来事を正しく言いあてた。まことに彼こそが世に言う超人である。私などにはもとから知り尽くすことができないのだ。」

【注釈】

- 近郊：城郭の外、五十里までの地域。『周禮』地官・載師「載師掌任土之灋。以物地事授地職、而待其政令。以廛里任國中之地、以場圃任園地、以宅田、士田、賈田、任近郊之地。」鄭玄注「杜子春云、……五十里爲近郊。百里爲遠郊。」唐代の一里は約六〇〇メートル。五十里は三〇キロメートルとなる。現在の西安から咸陽は、グーグルマップによれば約三〇キロメートルの距離である。
- 駕：天子の乗り物。ここは、皇帝が馬車で行幸する。
- 咸陽原：渭水を挟んで長安の北岸の咸陽にあった。墳墓の地でもあった。『新唐書』卷三七・地理志一「京兆府京兆郡。……咸陽、畿。武德元年析涇陽、始平置。有望賢宮。有便橋。有興寧陵、又有順陵、在咸陽原。」『陝西通志』卷九・山川二・西安府・咸陽縣・畢原「咸陽原、在渭水北九峻山南雍大記。西起武功、東盡高陵。其上文、武、成、康、周公、太公及秦漢君臣陵墓多在焉。亦曰、咸陽原、又謂之咸陽北阪。……縣志。」(『四庫全書』)
- 興：現れる、飛び出すの意味に解す。
- 轟然：身体が大きく丈夫なさま。
- 頗：はなはだ。相当に。
- 廚吏：料理番を統括する吏員。
- 脍：もも。
- 尚食：皇帝の食事を司る官僚。『大唐六典』卷十一・殿中省・尚食局「奉御二人、正五品下。……直長五人、正七品上。……食醫八人、正九品下。……主食十六人。……尚食奉御掌供天子之常膳、隨四時之禁、適五時之宜。……當進食、必先嘗。」
- 熟：調理済みで食べることができる状態。
- 俎：祭祀の時に犠牲をのせる台。
- 陛下幸聞之：『太平廣記』では「陛下幸問臣」に作る。ここの「幸」は、『史記』

- 卷六十三王世家「臣竊不勝犬馬心、味死願陛下詔有司、因盛夏吉時定皇子位。唯陛下幸察。臣去病味死再拜以聞皇帝陛下。」と同じ用法と考えられる。「廣記」の本文だと「陛下はどうか私にお尋ね下さいませよう」の意味になり、次に玄宗が笑って尋ねる描写とつながりやすい。
- 遂：ここでの用法がよくわからない。
 - 從臣：君主の侍從。
 - 仙鹿：『西陽雜俎』卷十六・廣動植之一「鹿。虞部郎中陸紹弟、爲盧氏縣尉、常觀獵人獵、忽遇鹿五六頭臨澗、見人不驚、毛斑如畫。陸怪獵人不射、問之。獵者言、此仙鹿也。射之不能傷、且復不利。陸不信、強之。獵者不得已、一發矢、鹿帶箭而去。及返、射者墜崖、折左足。」
 - 苑圃：「苑圃」と同義と考える。「苑圃」は皇帝の動植物園。
 - 麋鹿：トナカイのようなおおじかとしか。
 - 曩時：むかし。さきごろ。
 - 舍：解く。許す。
 - 東方朔：漢の武帝に寵愛された滑稽、道化的文人。
 - 鍊銅：精鍊された銅。
 - 誣：いつわる。あざむく。
 - 内臣：皇帝の側近の臣下。宦官。
 - 力士：高力士。
 - 鉗：かなばさみ。
 - 可二寸許：「可」は、おおよその数を表す。「許」については、次の説明は正確には該当する用例ではないが、参考になるうか。今しばらく、以下の説明に従っておく。中国社会科学院語言研究所古代漢語研究室『古代漢語虛詞詞典』（商務印書館、一九九九年）に「許、可与不定數詞、来、同義連用、也可用於表示不確定數量的由兩個相隣數詞構成的數詞短語後、或用於不確定的、數十、等後。這種用法的、許、意義很虛、可不訊出。」（傍線：川口）とあり、用例の一つとして『太平廣記』神仙七「王遠」「麻姑至、蔡經亦舉家見之、是好女子、年可十八九許。」（出『神仙傳』を引く。）
 - あるいは「可」は、強調の語で、「まさに」と訓じ、「ちよと二寸くらい」と訳すべきか。待考。
 - 蒙蔽：おおいかくす。
- 磨拭：磨いて汚れを拭き取る。
 - 蕪蔽：意味がよくわからない。望文正義であるが、すり減って見えにくい、という意味であろう。
 - 史：記録官。記録書。
 - 編：出来事を年代順に配列し、記録する。編年する。
 - 記伝：歴史や伝記。紀伝に同じ。ここは、『史記』『漢書』の漢武帝紀を指すと思われる。
 - 微：調べて明らかにする。
 - 第：ただうせよ。命令の語気をふくむ。
 - 歲：木星。古代の中国は木星の運行・位置によってその歳を決めた（『中国文化史大事典』『太歳』、武田時昌執筆）。
 - 水戦：水上でのいくさ。
 - 蒐狩：狩猟。春のかりは蒐、夏は苗、秋は獮、冬は狩という。一説に、秋のかりを蒐とする。それならば冒頭の「開元二十三年秋」と合う。狩猟は軍事訓練でもあった。次の「順礼」の注を参照。『爾雅』釋天「春獵爲蒐。夏獵爲苗。秋獵爲獮。冬獵爲狩。宵田爲獵。火田爲狩。」『春秋公羊傳』桓公四年「春。正月。公狩于郎。狩者何、田狩也。春日苗。秋曰蒐。冬曰狩。」
 - 順礼：儀礼にしたがう。『春秋穀梁傳』昭公八年「秋。蒐于紅、正也。因蒐狩以習用武事、禮之大者也。」
 - 因蒐狩以順礼焉：この句の挿入は唐突であるようにも思えるが、あるいは、玄宗の狩猟が娯楽のためであり、軍事訓練目的ではないことへの皮肉であるかもしれない。
 - 甲戌：開元二年（七三四）であり、このエピソードが「開元二十三年秋」とするのとくいちがう。
 - 八百五十二年：古小説叢刊本は、年数の計算によって、ここを「八百四十二年」と改めている。
 - 按：調べる。吟味する。調査する。
 - 少差：わずかな食い違い。
 - 至人：超越的境界に到達した人。超人。『莊子』逍遙遊「故曰、至人無己、神人無功、聖人無名。」福永光司・興膳宏『老子・莊子』（筑摩書房、二〇〇四年）以下、福永・興膳『老子・莊子』の注釈に「至人」は、「神人」「聖人」と

ともに荘子的な絶対者。……「無己」「無功」「無名」は単なる否定ではなく、一切の人間的なものの否定を媒介として、真に人間的なものを追求しようとするものである。これが荘子的な超越である。」とある。『莊子』齊物論「至人神矣。大澤焚而不能熱、河漢沍而不能寒、疾雷破山、飄風振海而不能驚。」郭象注「無心而無不順。」成玄英注「至者、妙極之體。神者、不測之用。夫聖人虛己、應物無方、知而不知、辯而不辯、豈得以名言心慮億度至人耶。」●固：もとから。はじめから。

●可得：可能をあらわす。文中のように「可得而」という形をとることもある（楚永安『文言複式虚詞』、中国人民大学出版社、一九八六年）。

三、(九)李頎「謁張果先生」

本節では、李頎「謁張果先生」詩の訳注を示す。張果に贈られた詩歌で残っているのはこの李頎詩のみであり、唐代の士人たちの交友の貴重な資料と位置づけることもできよう。

加えて、李頎は多くの道士や隱者と交友関係があり、また王維の「贈李頎」(『全唐詩』卷一二五)において、

聞君餌丹砂 聞く 君 丹砂を餌らい

甚有好顔色 甚だ 好き顔色有り

不知從今去 知らず 今從り去きて

幾時生羽翼 幾時にか羽翼生えん

とあるように、李頎自身も神仙思想に傾倒し、また修行をしていたことが伺え、のちに八仙の一人に数えられる張果への謁見は、その点からも興味深い。

(注1) 例えば、李迎春「試論李頎詩歌的藝術風格」(『河南教育学院学报(哲学社会科学版)』一九九六一)、王友勝「李頎詩中人物形象簡論」(中国唐代文学学会・西北大学中文系・広西師範大学学报社『唐代文学研究』九、二〇〇二年)、羅琴「論李頎的交往詩及其人物素描」(『重慶師範大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇八—四)などに指摘がある。

(注2) 劉宝和「簡論李頎及其詩」(劉宝和『李頎詩評注』、山西教育出版社、一九九〇年)、陳麗娟「李頎人物詩的獨創性及其原因」(『太原師範学院学报(社会科学版)』二〇〇六一三)などに指摘がある。

【底本】

●王錫九『李頎詩歌校注』(中華書局、二〇一八年)

本訳注は、王氏『校注』に多大な恩恵を受けている。またこれに加えて、劉宝和『李頎詩評注』(山西教育出版社、一九九〇年)、羅琴ほか『李頎及其詩歌研究』(巴蜀書社、二〇〇九年)を参照した。

00 李頎「謁張果先生(張果先生に謁ゆ)」

01 先生谷神者 先生は谷神なれば

02 甲子焉能計 甲子 焉くんぞ能く計えん

03 自說軒轅師 自ら説く 軒轅の師たりて

04 于今幾千歲 今に于いて 幾千歲なりと

05 寓遊城郭裏 城郭の裏に寓遊し

06 浪迹希夷際 希夷の際に迹を浪にす

07 應物雲無心 物に應じて 雲 心無く

08 逢時舟不繫 時に逢いて 舟 繫がず

09 餐霞斷火粒 餐霞 火粒を断ち

10 野服兼荷製 野服 荷を兼ねて製る

11 白雪淨肌膚 白雪のごとく肌膚淨く

12 青松養身世 青松のごとく身世を養う

13 韜精殊豹隱 精を韜すこと 豹隱に殊なり

14 煉骨同蟬蛻 骨を煉ること 蟬蛻に同じき

15 忽去不知誰 忽ち去りて 誰も知らず

16 偶來寧有契 偶たま來たるも 寧ぞ契有らんや

17 二儀齊壽考 二儀と壽考齊しく

18 六合隨休憩 六合に休憩を隨にす

19 彭聃猶嬰孩 彭聃 猶お嬰孩のごとく

20 松期且微細 松期すら且つ微細なり

21 嘗聞穆天子 嘗て穆天子に聞こえ

22 更憶漢皇帝 更に漢皇帝を憶ゆ

23 親屈萬乘尊 親ら万乗の尊を屈せしめ

24 將窮四海裔 將に四海の裔を窮めしめんとす

25 車徒遍草木 車徒 草木に遍く

26 錦帛招談説 錦帛 談説（ぜい）に招く

27 八駿空往還 八駿 空しく往還し

28 三山轉虧蔽 三山 転（うた）た虧蔽（へい）す

29 吾君感至德 吾が君 至徳（よ）に感じ

30 玄老欣來詣 玄老 來詣（よ）を欣ぶ

31 受籙金殿開 受籙 金殿開き

32 清齋玉堂閉 清齋 玉堂閉づ

33 笙歌迎拜首 笙歌 拜首を迎え

34 羽帳崇嚴衛 羽帳 嚴衛（ふか）に崇し

35 禁柳垂香爐 禁柳 香炉（か）に垂れ

36 宮花拂仙袂 宮花 仙袂（せん）を払う

37 祈年寶祚廣 年（みのり）を祈りて 宝祚は広まり

38 致福蒼生惠 福を致して 蒼生（そう）に恵みあり

39 何必待龍髯 何ぞ必ずしも龍髯（りゅう）の

40 鼎成方取濟 鼎成りて方（ま）に取濟するを待たんや

【詩型】

● 五言古詩

【押韻】 広韻：去声十二霽と去声十三祭の同用。

計―去声十二霽、歳・際―去声十三祭、繫―去声十二霽、製・世・蛻―去声

十三祭、契―去声十二霽、憩―去声十三祭、細・帝―去声十二霽、裔・説・

蔽―去声十三祭、詣・閉―去声十二霽、衛・袂―去声十三祭、惠・濟―去声

十二霽

● 平水韻：去声八霽

【制作背景】

● 『舊唐書』張果列傳（上篇所載）の「開元二十一年」の注を参照。張果と玄宗の

エピソードは、開元二二年から二四年、洛陽での出来事である可能性が高い。

この作品も、その時期、洛陽におけるものであろう。

● なお、唐人が張果に贈った詩歌で伝わるものはこの作品のみである。

【大意】

00 李頎「張果先生にお目にかかる」

01・02 張果先生は不老不死の谷の神であるので、御年をかぞえることなどできはしない。

03・04 ご自身で仰るには、かつては黄帝の師であり、それから今に至るまで幾千もの年月が経っているとのこと。

05・06 先生は、旅の途中でたまたま町なかに住まわれても、超俗の世界と俗世との境界線上で、もろもろのしきたりにとらわれず、自由奔放に振る舞われる。

07・08 何事にも自由にとだだよう空の雲のようにためにすることはなく、また絶好のチャンスが巡ってきたても、岸にたがれず船頭もない舟のように成り行き任せで一切に執着をお持ちではない。

09・10 五穀を断たれて太陽の精気を食され、ハスの葉で作った粗末な衣服を身に着けられている。

11・12 お肌は純白の雪のように汚れがなく、処世は色を変えない青々とした松のようにかたく節度を守ってゆるぎなく生きておられる。

13・14 その才能の神髄を隠しておられるのは南山の黒豹がその毛を大切に雨の日には山から下りてこないというようなみてくれの次元とは異なり、肉体を鍛錬して若さを保っておられるのは蟬が殻を抜け出るような戸解の結果なのである。

15・16 誰も知らないうちにふとお姿が見えなくなったかと思うと、何の前触れもなしに突然にやつてこられる。

17・18 その長寿は天地と等しく悠久で、この宇宙で自由に休息なされる。

19・20 先生にとつては、長寿で有名な彭祖と老子でさえも赤児のようであり、仙人の赤松子と安期生ですら取るに足らないのである。

21・22 先生は、仙界遊行し西王母にまみえた西周の穆王に意見を申し述べられたことがあり、さらには不老長寿を求めた西漢の武帝からご下問を受けたことを覚えておられる。

23・24 そのおり、先生は自ら、一万台の戦車を保有する尊位にある武帝をひざまづかせ、穆王には世界の果てを極めさせようとしたのである。

25・26 かくて穆王を乗せた馬車の一行は草木が生えるすべての地に轍を残し、武帝は仙界や不老長寿を説く方術の士を多く招き、にしきのきぬのご褒美を下賜されたのであった。

27・28 しかし、八匹の駿馬に引かれた穆王の馬車が天空を駆け巡ったことは無

駄に終わり、武帝が方士を派遣して尋ねさせた東海の三神山もゆけばゆくほどその姿がぼんやりとしてしまったのだった。

29・30さて、今上陛下は先生の最上級の徳に感じ入られ、玄老たる先生が拝謁に来られたことをお喜びになっている。

* 下句は、拝謁の榮譽に浴することを張果自身が喜んでいても解釈できる。

31・32儀式がはじまり、陛下は黄金の宮殿を開いて先生から道教の秘文を受けられ、玉で飾られた宮殿を閉じられて齋戒沐浴なされた。

33 34ついで、笙の笛の伴奏で歌がうたわれる中、陛下が両膝を地について深々とお辞儀をされ、宮中の儀仗隊の鳥の羽のとばりが高々と厳重に陛下をお守りしている。

35・36宮中の柳の枝が軒の吊り香炉に垂れかかり、禁苑の花が仙女の衣のためとを払っている。

* 下句は儀式における女道士の姿、あるいは宮中の女官や歌妓の艶姿にまつわる比喩的表現かもしれない。

37・38儀式では、陛下が五穀豊穰を祈念されて国運は隆盛し、幸福をもたらされて民草は恩恵を受けております。

39・40ですから、そのむかし黄帝が鼎を完成させてはじめて迎えに来たひげを垂らした龍に乗って昇仙したようなことを必ずしも待ち望まなくてもよいのではないでしょう。

* 末四句は、李頎から張果への言葉と解した。すなわち現世が理想郷であるので、皇帝の昇仙を待つまでもないという視点からの言祝ぎである。

【注釈】

00 謁：拝謁する。身分の高い人にお目にかかる。

00 先生：学問や技芸に優れた人に対する尊称。

01 谷神：谷の神。谷の中央の無なるところ。小川環樹『老子』（中公文庫、一九七三年。以下、小川『老子』）に従う。『老子』第六章「谷神不死、是謂玄牝。玄牝之門、是謂天地根。縣縣若存、用之不勤。」王弼注「谷神、谷中央無者也。無形無影、無逆無違、處卑不動、守靜不衰、物以之成而不見其形。此至物也。」

なお、大室幹雄『囲碁の民話学』（岩波書店、二〇〇四年）は「まず哲学的にみれば、「谷神」＝「玄牝」は道の隠喩にほかならない。」（二四七頁）とする。

02 甲子焉能計：『舊唐書』張果列傳（上篇所載）に「……有邢和璞者、善算人

而知天壽善惡。玄宗令算果、則慳然莫知其甲子。……因下制曰、恆州張果先生、遊方外者也。……莫詳甲子之數、且謂義皇上人。」とある。この句は「甲子」、時間すなわち張果の年齢は、定量的に測定可能なものではないこと言っていると考えられる。つまり時間という概念自体が無効化されている。それは「のつべらぼうのとめどない無時間」（大室前掲書一五四頁）とも言い換えうるだろう。

03 軒轅：伝説上の皇帝である黄帝の氏。これに類似する記事として、『新唐書』張果列傳（上篇所載）に「（張果）嘗云、我生堯丙子歲、位侍中。」とある。

04 于今：小川環樹『唐詩概説』（岩波書店、一九五八年）に「于と於是ほとんど同義。唐詩では于を用いることは稀で、于今（今において、如今と同じ）のみに于を書くのは、詩経の語（東山篇）による。」とある。

04 幾千歳：『舊唐書』張果列傳（上篇所載）に「時人傳其有長年祕術、自云年數百歳矣。」とある。

05 寓遊：旅寓。寓は宿る、仮住まいする。

05 城郭：都市。まち。内城の城壁が城、外城の城壁が郭。ここでは特に張果が招聘された都・洛陽を指しているのだろう。

06 浪迹：世俗の礼儀に拘らない。江淹「雜體詩三十首」張廷尉 雜述 綽「浪迹無蚩妍、然後君子道。」李善注「浪、猶放也。妍蚩、猶美惡也。戴逵栖林賦曰、浪迹潁湄、棲景箕岑。」（『文選』卷三）

06 希夷：道。視覚、聴覚、触覚で認識できないが故に、かえって超越的に全てに通ずる道理。『老子』第十四章「視之不見、名曰夷。聽之不聞、名曰希。搏之不得、名曰微。此三者不可致詰。故混而爲一。」王弼注「無狀無象、無聲無響。故能無所不通、無所不往。不得而知、更以我耳、目、體不知爲名。故不可致詰、混而爲一也。」

06 際：ここでは境界のような意味で解釈する。

07 応物：物事に対応する。『莊子』知北遊「老聃曰、……邀於此者、四肢彊、思慮恂達、耳目聰明、其用心不勞、其應物無方。」

07 雲無心：雲が自然に動くこと。陶淵明「歸去來」「雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。景翳翳以將入、撫孤松而盤桓。」（『文選』卷四五）『莊子』知北遊

「翳缺問道乎被衣、被衣曰……言未卒、翳缺睡寐。被衣大説、行歌而去之。曰、形若槁骸、心若死灰、眞其實知、不以故自持。媒媒晦晦、無心而不可與

諫。彼何人哉。」

●08 逢時：良い時運に巡り会う。チャンスに巡り会う。ここでは特に玄宗に招聘されたことを指しているのだろう。『漢書』巻五四・李廣傳「文帝曰、惜廣不逢時、令當高祖世、萬戶侯豈足道哉。」

●08 舟不繫：舟が繋がれず漕ぎ手もない。命運に任せて自由に生きる。『莊子』列禦侯「(列子)曰、……巧者勞而知者憂、無能者無所求、飽食而敖遊、汎若不繫之舟、虛而敖遊者也。」成玄英疏「夫物未嘗爲、無用憂勞、而必以智巧困弊、唯聖人汎然無係、泊爾忘心、譬彼虛舟、任運逍遙。」

●09 餐霞：「霞」はあさやけ、ゆうやけ。日の精気と考えられ、それを食らうのは仙人の不老長生術。『川合康三ほか計六人注』『文選詩篇』(二) 顔延之「五君詠五首」「嵇中散」、岩波書店、二〇一八年。以下、六人注『文選』。『漢書』巻五七下・司馬相如傳下「乃遂奏大人賦。其辭曰、……呼吸沆瀣兮餐朝霞、咀嚙芝英兮嚼瓊華。」顏師古注「應劭曰、列仙傳陵陽子言春食朝霞。朝霞者、日始欲出赤黃氣也。夏食沆瀣。沆瀣、北方夜半氣也。并天地玄黃之氣爲六氣。」顔延之「五君詠五首」「嵇中散」「中散不偶世、本自餐霞人。」李善注「沆瀣、謂仙也。楚辭曰、漱正陽而含朝霞。司馬相如大人賦曰、呼吸沆瀣朝霞。」(『文選』巻二)

●09 断火粒：「火粒」は、五穀。火を通して食べるのでこういう。これを食べないことを「辟穀」という。「穀物を摂取しないこと。……これは断食を指すのではない。陰たる地から取れる五穀は濁った気から成るものと考えて、摂取するのを避け、清浄な天の気を吸い、より清らかな精気から成ると考えられる食物を食べ、自己の体内宇宙に湧き出る唾液(玉液と称される)などの精気を摂ることによって、身体を純粹化し、軽やかなものにしよというのである。……身体を純粹化するのには不老長生を目的とする……」(『道教事典』、石田秀実執筆)。『藝文類聚』巻七八・靈異部上・仙道「晉張華詠蕭史詩曰、蕭史愛長年、羸女老童顏。火粒願排斥、霞霧好登攀。」『莊子』逍遙遊「藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、淖約若處子。不食五穀、吸風飲露。乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。」成玄英疏「五穀者、黍、稷、麻、菽、麥也。」

●10 野服：在野の者が着る服。『禮記』郊特牲「大羅氏、天子之掌鳥獸者也。諸侯貢屬焉、草笠而至、尊野服也。」鄭玄注「諸侯於蜡使、使者戴草笠貢鳥獸也。詩云、彼都人士、臺笠緇撮。又曰、其餉伊黍、其笠伊糾。皆言野人之

服也。」孔穎達疏「尊野服也者、草笠是野人之服。今歲終功成、是由野人而得、故重其事而尊其服。」『晉書』巻九四・隱逸列傳・張忠列傳「及至長安、(符)堅賜以冠衣、辭曰、年朽髮落、不堪衣冠、請以野服入覲。從之。」

●10 兼：尽くす。全て。

●10 荷製：『楚辭』離騷「製芰荷以爲衣兮、纍芙蓉以爲裳。」王逸注「製、裁也。芰、菱也。秦人曰薜荔。荷、芙蓉也。……芙蓉、蓮華也。上曰衣、下曰裳。言己進不見納、猶復裁製芰荷、集合芙蓉、以爲衣裳、被服愈潔、脩善益明。」

●11 白雪淨肌膚：「09断火粒」の『莊子』を参照。「肌膚」は、はだ。ここでは世俗の塵にけがれていないという意味もあろう。

●12 青松：松は柏とともに、その葉の色を一年中変えないので、貞節であり、志が堅いことを喩える。『論語』子罕「子曰、歲寒、然後知松栢之後彫也。」『禮記』禮器「禮、器、……其在人也、如竹箭之有筠也、如松栢之有心也。二者居天下之大端矣。故貫四時而不改柯易葉。」劉孝標「廣絶交論」「銜恩遇、進款誠。援青松以示心、指白水而旌信。」(『文選』巻五五)

●12 身世：一生涯。なお「養身」の用例として、『列子』黃帝「(黃帝)曰、朕閒居三月、齋心服形、思有以養身治物之道、弗獲其術。疲而睡、所夢若此。今知至道不可以情求矣。朕知之矣。朕得之矣。而不能以告若矣。」「養世」の用例として、『孔子家語』三恕「孔子曰、……又嘗聞養世之君子矣、從輕勿爲先、從重勿爲後。」王肅注「赴憂患、從勞苦、輕者宜爲後、重者宜爲先、養世者也。」がある。

●13 韜精：才能を包み隠す。顔延之「五君詠五首」「劉參軍」「韜精日沈飲、誰知非荒宴。」李善注「廣雅曰、韜、藏也。賈逵國語注曰、精、明也。」(『文選』巻二)

●13 殊：異なる。超越している。

●13 豹隱：南山の玄豹がその毛を大切に、雨の時は山から下りてこないという故事から、自らの身を潔白にし、隠棲して仕官しないことの喩え。『初學記』巻二・天部・霧第六「劉向列女傳曰、陶荅子妻者、陶太夫荅子之妻也。荅子化陶三年、名譽不興、家富三倍。其妻數諫曰、夫子能薄而官大、是謂嬰害。無功而家昌、是謂積殃。昔楚令尹子文之化、家貧而國富、福結於子孫、名垂於後代。今夫子貪富務大、不顧後害。妾聞南山有玄豹、霧雨七日而不下食者、何也。欲以澤其毛而成文章也、故藏而遠害。今君若此、皆不免後患。」

- 14 煉骨：「鍊骨」に同じ。肉体を鍛錬し、若さを保つ。『藝文類聚』卷七八・靈異部上・仙道「晉庾闡遊仙詩」又曰、……赤松霞霧乘煙、封子鍊骨凌仙。滄漱水玉心玄、故能靈化自然。」また、杜甫「寄劉峽州伯華使君四十韻」に「鍊骨調情性、張兵撓棘矜。養生終自惜、伐叛必全懲。」とあり、その『九家集注』（卷二九）に「養生論曰、修性以保神、安心、全身。文子、太上養神、其次養形。」とある。『道教事典』「鍊形」（吾妻重二執筆）に「道教の養生術のひとつ。一般に肉体を鍛錬して若さを保つこと」。
- 14 蟬蛻：蟬が殻を抜け出る。ここでは、尸解に同じ。『新唐書』張果列傳（上篇所載）の注を参照。『後漢書』卷四九・仲長統列傳「又作詩二篇、以見其志。辭曰、飛鳥遺跡、蟬蛻亡殼。」李賢注「王充論衡曰、蟬蛻化爲復育、復育轉爲蟬。蟬之去復育、龜之解甲、蛇之脫皮、可謂尸解矣。」
- 16 偶：思いがけず。
- 16 契：約束。
- 17 二儀：天と地。両儀。『易經』繫辭上「是故易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。八卦定吉凶。吉凶生大業。」韓康伯注「夫有必始於无。故太極生兩儀也。太極者无稱之稱、不可得而名。取有之所極、況之太極者也。」孔穎達疏「正義曰、太極謂天地未分之前、元氣混而爲一。即是太初太一也。故老子云、道生一。即此太極是也。又謂混元既分、即有天地。故曰、太極生兩儀。即老子云一生二也。不言天地而言兩儀者、指其物體下與四象相對。故曰兩儀。謂兩體容儀也。」潘岳「爲賈謐作贈陸機」「肇自初創、二儀烟燭。」李善注「周易曰、易有太極、是生兩儀。王肅曰、兩儀、天地也。易曰、天地烟燭、萬物化醇。」（『文選』卷二四）
- 17 寿考：長寿。『詩經』大雅「棫櫟」「周王壽考、遐不作人。」鄭玄箋「周王、文王也。文王是時九十餘矣、故云壽考。」
- 18 六合：天地四方。全宇宙空間。『莊子』齊物論「六合之外、聖人存而不論。六合之内、聖人論而不議。」成玄英疏「六合者、謂天地四方也。六合之外、謂衆生性分之表、重玄至道之鄉也。」
- 18 休憩：やすみいこう。休息。謝靈運「還舊園作見顏范二中書」「雖非休憩地、聊取永日閑。」（『文選』卷二五）。六人注「文選詩篇（四）」（岩波書店、二〇一八年）では「隱棲」と訳す。
- 19 彭聃：彭祖と老聃（老子）。長寿であったと伝わる。『史記』卷六三・老子列傳「老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏、名耳、字聃。……蓋老子百有六十餘歲、或言二百餘歲、以其脩道而養壽也。」『藝文類聚』卷七八・靈異部上・仙道「（神仙傳）又曰、彭祖、諱鏗。帝顓頊玄孫。至殷之末世、年已七百餘歲而不衰。少好恬靜、惟以養神治生爲事。」嵇康「五言詩三首」其二「苟必有終極、彭聃不足多。」（逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』『魏詩』卷九、中華書局、一九八三年。以下、『文選』『藝文類聚』など特に示した場合以外の唐前詩の引用はこれによる。）
- 19 嬰孩：おさなご。
- 20 松期：赤松子と安期生。仙人。『史記』卷五五・留侯世家「留侯乃稱曰、……願弃人間事、欲從赤松子游耳。乃學辟穀、道引輕身。」索隱「列仙傳、神農時雨師也。能入火自燒、崑崙山上隨風雨上下也。」『藝文類聚』卷七八・靈異部上・仙道「（列仙傳）又曰、赤松子、神農時雨師。服水玉、教神農。能入火自燒。至崑崙山西王母石室、隨風雨上下。炎帝少女追之、亦得仙俱去。高辛時爲雨師。」『史記』卷二八・封禪書「（李）少君言於上曰、……臣嘗游海上、見安期生、安期生食臣棗、大如瓜。安期生僊者、通蓬萊中、合則見人、不合則隱。」『藝文類聚』卷七八・靈異部上・仙道「（列仙傳）又曰、安期生、琅耶阜鄉人。賣藥海邊、時人皆言千歲公。秦始皇請見、與語三日三夜。賜金璧數萬、出於阜鄉亭皆置去。留書、以赤玉烏一量爲報。曰、復千歲。來求我於蓬萊山下。始皇遣使者數人入海、未至蓬萊山、輒風波而還。立祠阜鄉亭、海邊十處。」
- 20 且：〜ですら。〜でもなお。
- 20 微細：身分が低い。存在がちっぽけである。
- 21 聞：奏聞、聞奏。皇帝に申し上げる。
- 21 穆天子：西周の穆王。『穆天子傳』という作者不詳の仙界を描く古小説がある。それは「不準という者が、晋の太康2年（281）に、汲郡（河南省汲県）にある魏の襄王の墓を盗掘して発見したもの。……内容は、西周の穆王が崑崙に登り西王母の国を訪問したことを述べ（1巻〜5巻）、第6巻には、美女の盛姫と恋愛して結婚し、その死去するや盛大な葬儀を行ったことが述べられている。」（『道教事典』、御手洗勝執筆）
- 22 漢皇帝：前漢の武帝。不老長寿を求めたことでも知られる。『漢武帝内傳』という作者不詳の仙界を描く古小説がある。それは「漢の武帝が西王母・上

元夫人と宴をともし、「五岳真形図」「五帝六甲靈飛等十二事」の2書を授けられることを描いた伝記。』(『道教事典』、山田利明執筆)

●22屈：こは、跪くと解す。『漢武帝内傳』には、武帝が西王母やその侍女にひざまづいたという描写がある。「至四月戊辰、帝夜間居承華殿。東方朔、董仲舒侍。忽見一女子着青衣、美麗非常。帝愕然問之。女對曰、我墮宮玉女王子登也。向爲王母所使從崑山來。語帝曰、聞子輕四海之尊、尋道求生、降帝王之位、而屢禱山嶽。勤哉。有似可教者也。從今日清齋、不閑人事、至七月七日王母暫來也。帝下席、跪諾。……王母唯扶二侍女上殿。侍女年可十六七、服青綾之袿裾。……王母上殿東向坐。……下車登牀。帝拜跪。」(『正統道藏』)

●23万乘：一万台の戦車。戦争の時にそれを出すことができる大国の君主。皇帝。『孟子』梁惠王上「萬乘之國、弑其君者、必千乘之家。」趙岐注「萬乘、兵車萬乘、謂天子也。」なお李白「古詩五十九首」其四三に「周穆八荒意、漢皇萬乘尊。」(『全唐詩』卷一六一)とある。

●24四海：世界を囲むとされていた四つの海。『尚書』虞書・益稷「禹曰、……予決九川、距四海。」孔安國傳「距、至也。決九州名川通之至海。」『禮記』王制「凡四海之内、九州。州方千里、州建百里之國三十、七十里之國六十、五十里之國百有二十、凡二百一十國。」

●24裔：果て。辺境。

●25車徒：騎馬や馬車と従者。李康「運命論」「故遂裂其衣服、矜其車徒、冒其貨賄、淫其聲色、脈脈然自以爲得矣。」劉良注「車徒、謂車馬侍從也。」(『六臣註文選』卷五三)、袁淑「効曹子建樂府白馬篇」(『籍籍關外來、車徒傾國鄭。』李善注「籍籍關外來、謂被徙關中也。車徒傾國鄭、從者之多也。」「文選』卷三二)

●25通草木：「車徒」の進んだ轍や足跡が草木の生える土地すべてすなわち天下に残った、ということか。『尚書』虞書・益稷「禹曰、兪哉。帝光天之下、至于海隅蒼生。」孔安國傳「光天之下、至于海隅蒼蒼然生草木、言所及廣遠。」『春秋左氏傳』昭公十二年・傳「(子革)對曰、臣嘗問焉。昔穆王欲肆其心、周行天下、將皆必有車轍馬跡焉。」

●26錦帛：にしきのきぬ。武帝が道士に賜った財貨を指すか。『史記』卷二八・封禪書「齊人少翁以鬼神方見上。上有所幸王夫人、夫人卒、少翁以方

蓋夜致王夫人及竈鬼之貌云、天子自帷中望見焉。於是乃拜少翁爲文成將軍、賞賜甚多、以客禮禮之。……文成言曰、上即欲與神通、宮室被服非象神、神物不至。……居歲餘、其方益衰、神不至。乃爲帛書以飯牛、詳不知、言曰此牛腹中有奇。殺視得書、書言甚怪。天子識其手書、問其人、果是僞書、於是誅文成將軍、隱之。」なお羅琴ほか『李頎及其詩歌研究』は「皇帝の詔書」と解す。

●26談説：「説」の音は「ゼイ」。押韻上そうなる。「遊説」の「説」。説き勧める。『漢語大詞典』に「説談」の項目が二つあり、一つの説をゼイ(ㄗㄟ)と読ませている。意味は「遊説」。用例は『淮南子』主術訓「主上闇而不明、羣臣黨而不忠、説談者游於辯、脩行者競於住。」

●27八駿：周の穆王の八匹の駿馬。これに穆王が乗る馬車を引かせる。『穆天子傳』卷一「乙丑、天子西濟于河、□爰有温谷樂都、河宗氏之所遊居。丙寅、天子屬官效器。乃命正公郊父、受敕憲、用申八駿之乘。以飲于枝持之中、積石之南河。天子之駿、赤驥、盜驪、白義、踰輪、山子、渠黃、華騶、綠耳。」『同』卷四「癸酉、天子命駕八駿之乘、右服黼騶而左綠耳、右騶亦麗而左白莪。天子主車、造父爲御、閭閻爲右。次車之乘、右服渠黃而左踰輪、左騶盜驪而左山子。柏天主車、參百爲御、奔戎爲右。天子乃遂東南翔行、馳驅千里、至于巨蒐氏。」(『百部叢書集成』)

●27空：穆王が西王母に会ったにもかかわらず不老不死を得なかったことを言うのであろうか。また、美女の盛姫と恋愛して結婚するも、盛姫に先立たれてしまったことを言うのであろうか。

●28三山：伝説中の三神山。『史記』卷六・秦始皇本紀「齊人徐市等上書、言海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之。請得齋戒、與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人。」『同』卷二八・封禪書「於是天子始親祠竈、遣方士入海求蓬萊安期生之屬、而事化丹沙諸藥齊爲黃金矣。……入海求蓬萊者、言蓬萊不遠、而不能至者、殆不見其氣。上乃遣望氣佐候其氣云。……上遂東巡海上、行禮祠八神。齊人之上疏言神怪奇方者以萬數、然無驗者。乃益發船、令言海中神山者數千人求蓬萊神人。……東至海上、考入海及方士求神者、莫驗、然益遣、冀遇之。……臨勃海、將以望祀蓬萊之屬、冀至殊廷焉。……而方士之候祠神人、入海求蓬萊、終無有驗。」(王錫九『李頎詩歌校注』の要約に従う)

- 28 虧蔽：おおいかくされる。
- 29 吾君：玄宗皇帝を指す。
- 29 至德：最上級の徳。『莊子』秋水「道人_レ不聞、至德_レ不得、大人_レ無己。」成玄英疏「得者、不喪之名也。而造極之人、均於得喪、既無所喪、亦無所得。故老經云、上徳不徳。」『論語』泰伯「子曰、泰伯其可謂至徳也_レ已矣。」
- 30 玄老：常套の語彙ではないようである。奥深く根源的な道を体得した人物への尊称と解す。ここは、張果のこと。
- 30 來詣：拜謁にやってくる。
- 31 受籙：「籙」は道教の秘文。沈約「齊故安陸昭王碑文」「公諱緬、字景業、南蘭陵人也。稷契身佐唐虞、有大功於天地。商武姬文、所以膺圖受籙。」李善注「毛詩商頌曰、武王載旆。毛萇曰、武王、湯也。春秋命歷序曰、五徳之運、同徵符合、膺籙次相代。尚書璇璣鈴、孔子曰、五帝出受圖籙。」(『文選』卷五九)、『隋書』卷三五・經籍志四「道經者、云有元始天尊、生於太元之先、稟自然之氣、沖虛凝遠、莫知其極。所以說天地淪壞、劫數終盡、略與佛經同。……其受道之法、初受五文籙、次受三洞籙、次受洞玄籙、次受上清籙。籙皆素書、紀諸天曹官屬佐吏之名有多少、又有諸符、錯在其間、文章詭怪、世所不識。受者必先潔齋、然後齋金環一、并諸贄幣、以見於師。師受其贄、以籙授之、仍剖金環、各持其半、云以爲約。弟子得籙、緘而佩之。」
- 31 金殿：黄金で飾られた宮殿。ここは皇帝の宮殿。江淹「雜體詩三十首」「劉文學 感遇 楨」「華月照方池、列坐金殿側。」李善注「古歌辭曰、上金殿、酌玉樽。」(『文選』卷三二)
- 32 清齋：沐浴して身を清め、飲食行動を慎み、心を統一する。物忌みする。ここは、以下六句に描かれる儀式のための齋戒である。上の注31「受籙」の『隋書』も参照。支遁「五月長齋詩」「令月肇清齋、徳澤潤無疆。」(『晉詩』卷二十)
- 32 玉堂：玉で飾られた宮殿。ここは皇帝の宮殿。宋玉「風賦」「然後倘佯中庭、北上玉堂、躋于羅帷、經于洞房、迺得爲大王之風也。」(『文選』卷十三)、揚雄「解嘲」「今吾子幸得遭明盛之世、處不諱之朝、與羣賢同行、歷金門、上玉堂有日矣。」李善注「應劭曰、待詔金門。晉灼曰、黃圖有大玉堂、小玉堂。」呂延濟注「金門、天子門也。玉堂、天子殿也。有日矣言久也。」(『六臣註文選』卷四五)
- 33 笙歌：笙の笛の音楽とそれに合わせた歌。『禮記』檀弓上「孔子既祥、五日彈琴而不成聲、十日而成笙歌。」鄭玄注「祥亦凶事、用遠日。五日彈琴、十日笙歌、除由外也。琴以手、笙歌以氣。」孔穎達疏「十日而成笙歌者、上云彈琴而不成聲。此云十日而成笙歌之聲、音曲諧和也。」
- 33 拜首：頭を組んだ手のところまでおろし、つぎに両膝を地について、頭を地につけるお辞儀。「拜手」とも。『尚書』商書・太甲中「伊尹拜手稽首、曰……」孔安國傳「拜手、首至手。」孔穎達疏「此言拜手稽首者、初爲拜頭至手、乃復申頭以至于地、至手。是爲拜手至地乃爲稽首。然則凡爲稽首者、皆先爲拜手乃後爲稽首。故拜手稽首連言之。諸言拜手稽首義、皆同也。」徐陵「梁貞陽侯重與王太尉書」「但大齊仁信之道、關于至誠、睦鄰之懷、由于孝徳。遂蒙殊獎、歸嗣本朝。拜首陳辭、敦誘彌廣。」(『全陳文』卷八)
- 34 羽帳：鳥の羽で作ったとばり。ここはあるいは禁軍の儀仗隊の幟のようなものが連なっていることかもしれない。鮑照「擬行路難十八首」其一「奉君金卮之美酒、瑇瑁玉匣之雕琴。七綵芙蓉之羽帳、九華蒲萄之錦衾。」(『宋詩』卷七)。
- 34 嚴衛：嚴重な近衛軍。李嶠「爲第十舅讓殿中監兼仗內閣殿表」「遂攀於星漢、位非徳進、榮以恩昇。……預金門之通籍、扈清切之嚴衛、接綳繆之宴私。」(『全唐文』卷二四四)
- 35 禁柳：禁苑すなわち宮中の庭園の柳。ここが早い用例か。顧況「宮詞五首」其一「禁柳煙中聞曉鳥、風吹玉漏盡銅壺。」(『全唐詩』卷二六七)
- 35 香炉：柳の枝との関係から、ここは軒などにつるされた香炉であろう。
- 36 宮花：宮中の花木。楊炯「唐右將軍魏哲神道碑」「營中習禮、宮花如錦。還臨拜將之壇、槐葉成帷、復對閱軍之市。」(『全唐文』卷一百九十四)、李白「宮中行樂詞八首」其五「繡戶香風暖、紗窗曙色新。宮花爭笑日、池草暗生春。」(『全唐詩』卷一六四)
- 36 仙袂：仙人の衣のたもと。白居易「長恨歌」「風吹仙袂飄飄舉、猶似霓裳羽衣舞。」(『全唐詩』卷四三五)
- 37 祈年：五穀の豊作を天地の神に祈る。『詩經』大雅「雲漢」「祈年孔夙、方社不莫。」鄭玄箋「我祈豐年甚早。」
- 37 寶祚：國運。沈約「恩倖傳論」「民忘宋徳、雖非一塗、寶祚夙傾、實由於此。」李善注「寶祚、猶寶命也。」張銑注「忘、厭也。言人厭宋徳非一事也。祚謂

國命也。」（『六臣注文選』卷五十）

●38 致福：幸福をもたらす。『漢書』卷二五下・郊祀志下「元鼎、元封之際、燕齊之間方士曠目掘擊、言有神僊祭祀致福之術者以萬數。其後、（新垣）平等皆以術窮詐得、誅夷伏辜。」

●38 蒼生：民衆。史岑「出師頌」「蒼生更始、朔風變楚。」李善注「蒼生、猶黔首也。尚書曰、至于海隅蒼生。」（『文選』卷四七）

●39 龍髻：龍のあごひげ。『史記』卷二八・封禪書「上曰、申公何人也。（公孫）卿曰、申公齊人、與安期生通、受黃帝言、無書、獨有此鼎書。曰、漢興復當黃帝之時。曰、漢之聖者、在高祖之孫且曾孫也。寶鼎出而與神通、封禪。封禪七十二王、唯黃帝得上泰山封。申公曰、漢主亦當上封、上封則能僊登天矣。……黃帝采首山銅、鑄鼎於荆山下。鼎既成、有龍垂胡頰下迎黃帝。黃帝上騎、羣臣後宮從上龍七十餘人、龍乃上去。餘小臣不得上、乃悉持龍頰、龍頰拔、墮、墮黃帝之弓。百姓仰望黃帝既上天、乃抱其弓與胡頰號、故後世因名其處曰鼎湖、其弓曰烏號。」

●40 鼎成：39「龍髻」の注を参照。また『道教事典』「爐鼎」（吾妻重二執筆）に「外丹の場合、爐はいわゆるかまどであり、……鼎は丹薬の材料を入れる器、いわゆる反応室のことで、……爐の内部に鼎をすえ、これを加熱することによって、鼎の中にある薬物に化学変化を起こさせ、丹に作りかえる」とある。

●40 方：はじめて。

●40 取濟：ものごとを獲得する、成し遂げる。ここは、不老不死を得ること。『宋書』卷六八・南王義宣列傳「太傅江夏王義恭又與義宣書曰、……未聞聖主御世、百辟順軌、稱兵於言興之初、扶危於既安之日、以此取濟、竊爲大弟憂之。」

（中国文学）

Translations and Notes of Documents Relating to Zhang Guo 張果

Part2

KAWAGUCHI Yoshiharu
(Chinese Literature)

Abstract

Zhang Guo 張果 is well known as one of the Baxian 八仙 or the Eight Immortals of Daoism.

This paper contains the following translations and notes of documents that are fundamental to research relating to Zhang Guo:

- (1) Jiutangshu Zhang Guo zhuan 『舊唐書』張果傳
- (2) Xintangshu Zhang Guo zhuan 『新唐書』張果傳
- (3) Xintangshu Yiwenzhi 『新唐書』藝文志
- (4) Songshi Yiwenzhi 『宋史』藝文志
- (5) Quantangwen Zhang Guo zhuan 『全唐文』小傳
- (6) Quantangshi Zhang Guo zhuan 『全唐詩』小傳
- (7) Taipingguangji “Zhang Guo” 『太平廣記』「張果」
- (8) An episode of Xuanshizhi 『宣室志』 in which Zhang Guo is the lead character.
- (9) Li Qi “Ye Zhang Guo Xiansheng” (verse) 李頎「謁張果先生」詩
- (10) Zhang Guo “Daoti Lun Xu” 張果「道體論序」
- (11) Zhang Guo “Huangdi Yinfu Zhu Xu” 張果「黃帝陰符注序」
- (12) Zhang Guo “Taishang Jiuyao Xinyin Miaoqing Xu” 張果「太上九要心印妙經序」
- (13) Zhang Guo “Ti Dengzhendong” (verse) 張果「題登真洞」詩

This paper is divided into 3 parts. Publication part 1 is (1)–(6) and most of (7). Publication part 2 includes the remainder of (7), and (8) and (9). Part 3 is (10) – (13) next year.

